

多職種協働プレパレーションの実際 日本小児看護学会第27回学術集会のテーマセッションを通して

Actuality of Multi-occupational Collaborative Preparation : Theme Session of the 27th Meeting of the Japanese Society of Child Health Nursing

村井 博子¹⁾*, 流郷 千幸¹⁾, 古株 ひろみ²⁾, 平田 美紀¹⁾,
鈴木 美佐¹⁾, 玉川 あゆみ²⁾, 赤松 志麻³⁾, 柴田 まゆみ⁴⁾, 渡辺 恵子⁵⁾
Hiroko Murai, Chiyuki Ryugo, Hiromi Kokabu, Miki Hirata

Misa Suzuki, Ayumi Tamagawa, Shima Akamatu, Mayumi Shibata, Keiko Watanabe

キーワード プレパレーション, 多職種協働, テーマセッション

Key Words Preparation, Multi-disciplinary medical teams, Theme session

I. はじめに

プレパレーションとは、病気や入院で医療処置を受ける子どもに引き起こされる不安や恐怖を最小限にし、子どもの対処能力を高めるためにその子どもに適した方法で心の準備やケアを行い環境を整えることである(及川 2006)。わが国では、1994年に子どもの権利条約が批准されて以降、医療現場において子どもや家族の権利を尊重したプレパレーションが注目されている。

医療処置を受ける子どもへのプレパレーションに関する看護師の意識調査では、小児専門病院や大学病院に勤務する看護師と比較して、総合病院の小児病棟や小児混合病棟に勤務する看護師のプレパレーションの認知は低い傾向にあることが報告されている。そこで、研究者らは総合病院に勤務する看護師のプレパレーションに関する認知向上をめざし、平成25(2013)年に“滋賀子どものプレパレーション検討会”(2016年に“子どものプレパレーション検討会”に改名。以下、検討会とする。)を発足した。検討会ではプレパレーションの定義や研究報告などの情報提供を行い、看護師の認知向上と子どもの権利を尊重した看護の意識づけにつながった。このような平成23年度から平成26年度の活動内容を「総合病院小児病棟のプレパレーション定着を目指した検討会の取り組み

と課題」として論文にまとめ、聖泉看護学研究第5巻53-60頁に掲載している。また、平成27(2015)年には日本小児看護学会第25回学術集会において「総合病院におけるプレパレーション定着に向けた取り組み」(流郷ら 2015)、平成28(2016)年には同学会において「小児看護学実習におけるプレパレーション」(流郷ら 2016)と題してテーマセッションを開催し、意見交換を行った。

これまでの検討会の企画・運営や、テーマセッションでの意見交換の中で最もよく挙がる話題は、総合病院や大学病院小児病棟におけるプレパレーション定着の難しさ、スタッフ間のプレパレーションに対する関心の温度差、プレパレーションについて医師の理解・協力を得ることの厳しさといった内容であった。そこで、今年度は日本小児看護学会第27回学術集会において「多職種協働プレパレーションの実際」をテーマに掲げ、多職種が協働するプレパレーションへと変化がみられた3施設にどのようにプレパレーションを推進し、多職種との協働にいたったのか話題提供をしていただき意見交換を行うこととした。本稿では、日本小児看護学会第27回学術集会のテーマセッションの内容を報告する。

II. テーマセッションの概要

2017年8月19日(土)の11時から12時20分まで

1) 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

2) 滋賀県立大学 人間看護学部 看護学科 School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

3) 大阪医科大学附属病院 Osaka medical colleg hospital

4) 近江八幡市立総合医療センター Omihachiman community medical center

5) かなざきこどもクリニック Kanazaki childrens clinic

*E-Mail murai-h@seisen.ac.jp

の80分間。参加者は、約120名であった。ファシリテーターは流郷(聖泉大学)、古株(滋賀県立大学)が行い、話題提供は柴田(近江八幡市立総合医療センター小児病棟 看護師)、赤松(大阪医科大学附属病院小児病棟 看護師)、渡部(かなざきこどもクリニック 看護師)の3名が行った。

1. 総合病院における多職種協働プレパレーション：話題提供者 近江八幡市立総合医療センター小児病棟 柴田 まゆみ

近江八幡市立総合医療センター小児病棟では、平成24年に病棟保育士1名が配置されたが、主な業務は入院中の子どもの保育や壁面装飾など入院環境の整備であった。平成25年までプレパレーションは、看護師のみが実施していたが、看護師間にもプレパレーションに関する認識・知識に差があった。平成25年「子どものプレパレーション検討会」に看護師と共に保育士が参加することで、プレパレーションの基礎知識を改めて学習する機会となり、翌年には看護師と保育士が協働してプレパレーションツールを作成した。そのツールを用いてプレパレーションを実施するなかで、子どもの頑張る力や成長をスタッフは実感した。そんな病棟の風土の中で、医師は看護師が子どもに実施しているプレパレーションを見て、「これから処置をするので音の出る絵本を貸してほしい。」と言い、医師自らディストラクションツールを使用して創処置やエコー検査を行うようになった。

他部門との協働プレパレーションについて繰り返し手術を受けている4歳Aちゃんの事例を紹介する。Aちゃんは手術の度に泣きながら手術室に入室していた。担当看護師がAちゃんに何が嫌なのか聞くと、手術室看護師がマスクとキャップをつけていることに恐怖感をもっていること、マスク麻酔の臭いが嫌であることがわかった。主治医と病棟看護師、手術室看護師、麻酔科医でカンファレンスを行ない、事前に手術室を見学し手術室の看護師と話をすること、手術当日は手術室看護師がマスクとキャップを外してAちゃんを



迎え入れることとした。これらによってAちゃんの不安が軽減され、泣かずに麻酔導入ができた。プレパレーションに関わったスタッフ全員が、多職種協働によるプレパレーションによる成果(Aちゃんの手術に臨む力を引き出すことができたこと=成功体験)を共有し、多職種協働プレパレーションの重要性を再認識する機会となった。

2. 大学病院における多職種協働プレパレーション：話題提供者 大阪医科大学附属病院 小児病棟 赤松 志麻

大阪医科大学附属病院小児病棟は、専門性の高い治療を必要とする様々な疾患をもつ子どもが入院している。苦痛を伴う検査や特殊な治療が日々行われているため、子どもへのプレパレーションは重要な看護支援の一つとなっている。

大学附属病院では、普段子どもと接することが少ない部門とも協働してプレパレーションを行わなければならない。今回は放射線治療を受けた4歳のBちゃんの事例を通してその経過を振り返る。当施設では、これまで幼児への放射線治療には必ず鎮静剤を使用していたが、他職種が協働してプレパレーションを行うことで、鎮静剤を使用せずに治療が行えるようになってきた。Bちゃんの事例では小児科医、看護師、放射線技師で合同カンファレンスを行い、Bちゃんのもっている力を活かせる支援を検討した。まずBちゃんが治療の見通しをもって治療が受けられるように治療の日付を記載した治療カードを作成し、照射後に頑張りシールを貼ることにした。結果、Bちゃんは鎮静剤を使用せずに一連の治療を頑張っていることができた。子どもの力をスタッフが実感できる機会となった。病院内には小児科・小児病棟だけでなく、手術室・ICU・救急・各種検査室等、様々な場所に子どもがいる。子どもと接する機会の少ない部門とのプレパレーションにおける連携では、小児病棟看護師がその専門性を活かして子どもの特性に合わせた支援方法を提案し、部門や領域を超えた支援の協働を進めて行く必要があると感じている。

3. かなざきこどもクリニックにおける多職種協働プレパレーション：話題提供者 かなざきこどもクリニック 渡部 恵子

以前は、病気や処置の説明は保護者中心に行い、処置は保護者から子どもを分離し子どもをネットで抑制して行うことが通常化していた。しかし、子どものために抱っこ採血を取り入れたいという看護師の思いからプレパレーション勉強会を行った。当初、プレパレーションは時間を要し他の患者さんに迷惑がかかるのではないかと、保護者の目の前で採血を行うことは不安であるという否定的な意見が出ていたが、約2か月間プレパレーシ

ンを含めた抱っこ採血を実施し、その効果を評価することとなった。その結果、ネットでの抑制より抱っこ採血の方が採血所要時間は短縮し、溶血率、穿刺回数ともに少ないことが明らかになった。また、抱っこ採血を経験した保護者からは、付き添うことで子どもの頑張りがみられる、子どもが安心するという肯定的な意見が得られた。プレパレーションと抱っこ採血を実施し子どもの乗り越える力を引き出せたことや、保護者と信頼関係が構築できたことから、プレパレーションの取り組みに否定的であった医師やスタッフにも心境の変化がみられるようになり、現在では多職種（医師、看護師、保育士、栄養士、臨床心理士）で協働してプレパレーションと抱っこ採血を行うことが当たり前になった。

現在は、抱っこ採血時の子どもの安心感を評価するために、医師とともにオキシトシンのホルモンの値を測定する研究に取り組んでいる。

4. 意見交換

多職種協働のプレパレーションを実施していくうえで、多職種スタッフとの情報交換や、子どもにどのように説明しているのかなど活発な意見交換を行った。主な質問項目は、痛みを伴う処置を行う時のプレパレーション方法や、発達段階に応じた説明方法であった。

痛みを伴う医療処置については、医療処置の際に使用する器具や受ける感覚などを子どもの年齢に合わせて説明し、低年齢児にはディストラクションが有効であることなどについて意見交換を行った。

鎮静剤を使用せずに医療処置を受ける場合の判断については、事前の準備段階で子どもの理解力や反応を確認し本当に治療に立ち向かうことができるのか、主治医や検査部門のスタッフと一緒に査定し判断していることなどについて意見交換を行った。

抱っこ採血については、母親にプレパレーションを行い抱っこの仕方や体位の固定の仕方を指導している。小さい子どもにはプレパレーションよりもディストラクションが主となるため、看護師と保育士が協力し、子どもの発達段階に合わせたツールを選択し実施していることなどについて意見交換を行った。

Ⅲ. まとめ

プレパレーションを普及し定着させていくためには風土作りが重要となる。プレパレーションの意義や必要性を理解し合える風土があると、多職種への理解・協働につながりやすい。さらにプレ

パレーションを進めていくうえで重要なことはコアとなる看護師の存在とチーム作りである。

プレパレーションをどのように実施すればよいのか分からないという声もあるが、スタッフがプレパレーションを通して子どものもつ力を引き出し、子どもが上手く乗り越えられたのではないかと感じる成功体験が重要な要素の一つであるといえる。

文 献

- 平田美紀, 流郷千幸, 鈴木美佐, 他(2013): 総合病院小児病棟および外来におけるプレパレーションの現状と課題, 日本小児看護学会第23回学術集会講演集, 234.
- 平田美紀, 流郷千幸, 鈴木美佐, 他(2015): プレパレーション検討会に参加した総合病院小児病棟の看護師の認識の変化, 聖泉看護学研究, 4, 1-9.
- 平田美紀, 流郷千幸, 鈴木美佐, 他(2016): 総合病院小児病棟のプレパレーション定着を目指した検討会の取り組みと課題, 聖泉看護学研究, 5, 53-59.
- 村井博子, 流郷千幸, 平田美紀, 他(2017): 小児看護学実習におけるプレパレーション学習の実際と課題—日本小児看護学会第26回学術集会のテーマセッションを通して—, 聖泉看護学研究, 6, 39-43.
- 及川郁子, 田代弘子編(2006) 病気の子どもへのプレパレーション. 中央法規出版.
- 流郷千幸, 平田美紀, 鈴木美佐, 他(2015): 総合病院における乳幼児の採血実施状況とプレパレーションに関する看護師の認識, 小児保健研究, 74(5), 678-684.
- 流郷千幸, 古株ひろみ, 平田美紀, 他(2015): 総合病院におけるプレパレーションの普及に向けて, 日本小児看護学会第25回学術集会講演集, 60.
- 流郷千幸, 平田美紀, 鈴木美佐, 他(2016): 小児看護学実習におけるプレパレーション, 日本小児看護学会第26回学術集会講演集, 69.
- 鈴木美佐, 流郷千幸, 平田美紀, 他(2012): 総合病院外来で小児の採血にかかわる看護師のプレパレーションに関する認知, 第32回日本看護科学学会学術集会講演集, 441.
- 鈴木美佐, 流郷千幸, 平田美紀, 他(2013): 総合病院病棟で小児の採血にかかわる看護師のプレパレーションに関する認知, 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 520.